

の記事で見ると、四部合戦状本は、発展の契機とも考えられる要素を含んでいて、やはり重要な本だという認識を新たにしたい。

平家物語諸本における様相は本稿で押さえ得たかと思うので、個々の詰めについては、平家物語以外の資料で今後、考察を深めて行きたい。

(注一) 中世前期軍記における平家物語の特徴として、神祇信仰を含む宗教性の豊かさを挙げることが出来る。

(注二) 『鹿児島県立短期大学紀要』平成六年一二月。

(注三) 『語文研究』平成七年一二月。

(注四) 早く山本ひろ子「鬼界が島説話と中世神祇信仰」(『ORGAN』昭和六二年九月)に考察があり、筆者も注二の拙稿で論じている。

(注五) 近藤喜博氏によれば、弘安十一(一二八八)年前後の成立とされている。

(注六) 住吉明神託宣をめぐる諸書の異同等については阪口光太郎氏「延慶本『平家物語』に見える二神協働譚について」(『延慶本平家物語考証』一 平成四年五月)が詳しい。

(注七) 堂供養説話については、握美かをる「説話形成についての一考察——平家物語長門本の得長寿院供養譚をめぐる——」(『文芸研究』昭和三七年九月)以来諸氏に論があるが、筆者も拙稿「得長寿院の霊験譚について」(『鹿児島県立短期大学紀要』昭和五三年二月)で論じたことがある。

(注八) 十禅師の託宣や童については山本ひろ子氏に「中世日吉社の十禅師信仰と担い手集団——叡山・霊童・巫覡の三層構造をめぐる——」(『寺子屋語学文化研究所論叢』昭和五九年一二月)という詳しい論考がある。

平家物語の主な諸本に描かれた比叡山の神々(橋口)

(注九) 注八に同じ。

(注一〇) 早川厚一・佐伯真一・生形貴重三氏の「四部合戦状本平家物語評釈」(三)(『名古屋学院大学論集』昭和六〇年)で読み誤りの可能性が指摘されている。

(注一一) 『平家物語略解』(昭和四年九月)。

(注一二) 「『平家物語』に現われる日吉神社関係説話の考察」(『文芸言語研究』昭和五九年一二月)。

(注一三) 注一〇の佐伯氏の「考察」。

(注一四) 「『平家物語』挿入説話の説話論的考察——「願立」説話をめぐる——」(『軍記と語り物』昭和五六年三月)。

(注一五) 注三に同じ。

(注一六) 『永昌記』の記事は注一一に紹介されている。

(注一七) 覚算が死んでいた場所として中七社の「大行事ノ彼岸所」が八坂本を除く諸本にある。

(注一八) 「『平家物語』諸本に描かれた厳島大明神、厳島社」(一)(『人文』平成七年八月)。

(注一九) 『長崎大学教育学部人文科学研究報告』(昭和五五年三月)

〔付記〕本稿は、平成七年度中世文学会秋季大会における口頭発表を補足・修正してまとめたものである。

(一九九九年九月二十日 受理)

かさを記した逸話である。この逸話は澄憲の話として記されているが、当道系諸本や『日吉山王利生記』には記載されていない。『日吉山王利生記』に記されているものとしては第三節に記した良真座主が堀河天皇を祈り出したということがある。こちらは全ての平家物語に記されている。これらが靈験のあらたかさを語った逸話の最たるものであるが、一方で、祈願を拒絶したという逸話もいくつかある。全ての平家物語に記されているのは養和元年九月、主に木曾義仲を対象とした朝敵調伏の祈願の途中で覚算法印が死んでしまったことである。源平盛衰記は、この外に「成親望大將」で「横の儀をは神祇不用」の本朝での先例として、星御門の時、日唯季通が三公に昇りたいと山王に祈って逆に神罰を受け、滅んだという逸話を記している。この逸話は『日吉山王利生記』にはない。これらは祈願の主や依頼を受けて行法中の僧が神罰を受けたという極端な例であるが、日吉山王が聴き容れなかったというところで興味深いのは安德天皇の誕生の祈願である。既に別稿で触れたところであるが、皇子誕生祈願の為の日吉詣では慈円の『愚管抄』が記し、平家物語では覚一本を除く大方の諸本がこの逸話を載せている（諸本で参詣者を時子とするもの、清盛とするもの、夫婦二人とするものの違いがある）。筆者は、今井正之助氏の「『大塔建立』と『頼豪』——延慶本平家物語の古態性の検証——」^(註九)における「清盛夫婦が山王に祈って皇子が得られなかったのは、山王に皇子をもたらす力がなかったのではなく、新生の皇子、ひいては平氏の将来の危ういことをあらかじめ暗示するためであった」という捉え方が、この方向での最も妥当な結論ではないかと考える。

清盛が日吉社にも信仰を寄せていたことは、この皇子誕生祈願にも窺われるが、延慶本・長門本・源平盛衰記・四部合戦状本は、この他に摂政・関白の春日詣でも及ばない程の豪勢な参詣振り（覚一

本にもある）や持経者による千僧供養をも記している。但し、山王が清盛の願いを叶えたといった内容の逸話は特にはないようである。右の清盛の日吉信仰もおそらく後白河法皇の崇敬に影響されたものだった筈である。法皇が譲位後、最初に日吉社に参詣したことは全ての諸本に記されている。鳥羽殿に幽閉された法皇を見舞った静憲法印が「君ノ取分テ侍マヒラセ給フ日吉山王七社一乗守護ノ御誓違事ナクシテ彼法花八軸ニ立カケリテコソ護リマヒラセオワシマシ候ラメ」（延慶本）と言って慰めるのも、諸本に共通するところである。猶、清盛の場合と同様に山王が法皇を守護しているという旨の逸話には乏しい（静憲の言葉はあるが）が、長門本には或る人が夢で崇徳院、藤原頼長を始めとする保元の乱の怨霊が法住寺殿に向かおうとするが、日吉山王が法皇を守護しているので、清盛の西八条殿へ入ったというところを見る例がある（猶、源平盛衰記では天台座主が守っていることになっている）。

六

以上、平家物語の主な諸本に描かれた比叡山の神々について詳しく見て来た。

平家物語に出て来る比叡山の神は、全体として山王と呼ばれているが、それを祭る上七社の神は決して一様ではない。平家物語諸本の編著者は、各社の神々の関わり方に独自性を発揮させようとしていたのではないか、という感想さえある。

大宮・二宮と八王子・十禅師が最も多く出て来るが、大宮・二宮は山王神学に関わる面が多いようであり、八王子・十禅師は山門の大衆などの活動に触れて描かれている。

平家物語諸本が独自性を打ち出そうとしている様なので、諸本の成立の前後を決める材料としては利用し難いが、比叡山の神々関係

いずれも紀伊国田仲庄の寄進に触れている。このことは、『永昌記』その他の記録によつて撰関家の八王子講の存在に気付いた編著者などが、それを師通譚に取り込んだものと筆者は考えた^(註三〇)。

法華講の利益を後付譚と筆者が考えるのは、春日大明神の靈驗を記す諸本があるからである。棺にも納まらない程に腫れ上った師通の体をせめて恥じを隠せる程に戻して欲しいと父大殿が春日大明神に祈ったということは四部合戦本・長門本・源平盛衰記に出て来る。長門本・源平盛衰記のものは法華講の利益譚との取り合わせとなつてゐるが、その本の姿を示しているのが四部合戦本のものであろう。四部合戦本では山王の罰は体の腫れ一本で、余分なものがない。春日大明神が出て来るのも藤原氏の氏神だから当然である。山王の神罰は春日大明神の守護を越えて発現したと考えなければならぬ。四部合戦本は、山王の神罰を何よりも怖いものとして描いた。従つて、この説話の中で春日大明神が出て来ることも、白河上皇の崩御を山王の祟りとする 것도、その趣旨から別に異和感はない。四部合戦本のもものは、十禅師童子が北の方の祈願に結び付いて、この部分が複雑化して行く最初のものではなかったかと考へる。四部合戦本で山王の祟りの怖さが殊更に強調されたのは、屋代本の「御母北ノ政所是ヲ御歎キアテ祈申サセ給シカハ暫シハ御平癒ト聞ヘサセ給シカ遂ニ永長二季六月廿六日御病重ラセ給テ 同廿八日御季三十八ト申ニ薨御成ニケリ」の甘さを否定しようとしたからであると考えたい。

最後に山王の祟りが師通以外にも及ぶものについてだが、右の四部合戦本と延慶本・源平盛衰記、それに『日吉山王利生記』の四本がこの問題に係る。筆者は、対象の拡大の端緒を開いたのも四部合戦本であつたと考へる。四部合戦本の場合は「七」という字の解釈から上皇の死を祟りと判断したものであつた。大江匡房

の直話と称する伝承を取り込んだ延慶本・源平盛衰記と『日吉山王利生記』とは、これに暗示を得て、この説話に登場する関係者に崇りの対象者を拡大したと考へたい。『日吉山王利生記』の三名全員は明解だが、二名とする延慶本は安元三年の事件における重盛の位置に配慮したものであろう（源平盛衰記は二名という型を重んじたということであらうか）。

五

日吉山王は平安京の鬼門の鎮守とされている（延慶本が具体的）が、言うまでもなく山門擁護の神明として平家物語には多く描かれている。第三節・第四節で触れている神輿の動座はその象徴的な光景と見做せるし、第四節で扱った「願立」説話は正にその旨を語る説話であつた。延慶本・長門本・源平盛衰記に記されている頼寿・良円の罪を許したことも同趣旨の説話である。頼寿・良円の件も『日吉山王利生記』に収められているが、源平盛衰記が『日吉山王利生記』と同様に客観的に事件を描くのに対して、延慶本・長門本では大江匡房の言葉の中で例として挙げられる。平家物語の現存の事件では西光の刑死がそうである。西光の死は全ての平家物語で「切者ニテ世ヲ世トモ思ハス人ヲ人トモセサリシ余ニヤ 指モヤム事ナクヲハスル人ノアヤマチ給ハヌヲサヘサマノ 讒奏シ奉リケレハ 山王大師ノ神罰冥罰立所ニ蒙テ時尅ヲ廻サスカムル目ニアヘリ」（延慶本）といった見方がなされている。先の、「願立」説話、頼寿・良円についての説話は、この西光の神罰という捉え方を納得させる為の例話という観がある。

朝廷と山門とを擁護の対象とした日吉山王では様々の祈願が行われた。第二節に一部引用した飢饉・疫癘を払う比叡山の祈願の一環として供養が行われたという「山王効験事」は、その靈驗のあらた

いる匡房の直話として、この三本の周辺に伝えられていたかと思われる。

訴えも聴かれず、死傷者まで出たことに抗議して、山門では神輿を中堂に振り上げて師通を呪咀する(師忠が加えられることはない)ので、師通への神罰の物語というのが本来だったのだろう)。その際、源平盛衰記と四部合戦状は神輿動座の初例ということ強調する(長門本・源平盛衰記にもある)が、呪咀の様子についての具体的な記述はない。ところが、右二本以外の諸本のうち延慶本以外の諸本には、忠胤僧都が八王子社で師通を鎗矢で射るように祈願を込めたということが記されている(延慶本にも忠胤が導師を務めたという記事はある)。一方、延慶本と『日吉山王利生記』では同様の祈願を静信定額が行ったことになっている(延慶本が定額を人名と誤っていることは佐伯真一氏に指摘がある)^(注三)。又、延慶本と『日吉山王利生記』では、この時傷付いた禰宜を八王子社の拝殿に昇き入っていたことも記される(源平盛衰記にもあるが、そこでは多くの者の呪咀が描き加えられている)。

源平闘諍録・四部合戦状本以外では、祈願に応じて鎗矢が響くのが聞こえることになる。但し、諸本で描出に異同があり、源平盛衰記や南都本では即座に鎗矢の音が聞こえることになっているが、その他の諸本ではその夜聞こえることになっている(延慶本・長門本・屋代本・覚一本は夢で、中院本・八坂本は現に)。猶、源平盛衰記と長門本は複雑で、源平盛衰記では諸人が聞いただけでなく、当の師通もその夜夢で聞くといい、長門本では八王子社に通夜していた者が夢中で兵主の大明神が呼び出されて鎗矢を射る音を聞いて目が覚めるが、現にも西に向かって飛んで行くのを聞くといい。翌朝、師通邸に源平盛衰記では青櫛、その他の諸本では櫛が届いている。

こうして師通は神罰による重病を受けたのであった。以下の師通方の願立てと山王の反応については山下宏明氏^(注四)を始めとする先学の幾重もの考察があり、筆者も別稿^(注五)でその展開についての考察を纏めているので、いくつかの点に絞って記すに止めたい。

先ず、師通の母北の方の参籠に注目したい。北の方は源平闘諍録には全く登場することがなく、屋代本と『日吉山王利生記』では祈願を行った旨が記されている(簡詳の違いがある)が、特に日吉に参籠したとは記されていない。延慶本・源平盛衰記・覚一本・八坂本は日吉に参籠したとは記すが、特にその参籠先について明示することはない。しかし、四部合戦状本・長門本・南都本は参籠先を十禅師と明示し、一方、中院本は八王子と記している。

次に、源平闘諍録・屋代本と『日吉山王利生記』以外に登場して、北の方の心中の祈願を明かす童神子に注目したい。四部合戦状本・長門本・南都本・源平盛衰記はこの童神子を出羽国出身の者とし、十禅師に参籠していたとする。一方、延慶本・覚一本・中院本・八坂本は陸奥国出身の者とし、八王子に参籠していたとするのである。猶、延慶本の場合、八王子の社から昇き出された童神子の口から「八王子ノ社ヨリ比砌マテ廻廊作テ」という言葉が出て来るのは変で、十禅師の辺りまで昇き出されたと見なければならぬようである。

願立てによって師通が延命したかどうかの問題は、源平闘諍録を除く全ての諸本に係するが、このように相対立する見方が生じたのは別稿でも指摘したように事件の発端の年月日と師通の薨じた年月日(四年間という時間がある)しか日付けがない説話の中で解釈作業が行われた結果に違いない。

法華講を行うという誓いが出て来るのは源平闘諍録・屋代本・四部合戦状本を除く諸本と『日吉山王利生記』とであるが、これらは

入洛ノ時ハ座主ニ仰テ赤山ノ社ヘ奉入」(屋代本)とある(延慶本では本山、四部合戦状本は菩提山となっている)^(註一〇)。又、延慶本・長門本・源平盛衰記の「於延曆寺藥師經讀事」では「行事主典代庁官御布施供米ヲ相具テ西坂本赤山ノ堂ニテ是ヲ引」(延慶本)とある。以上の数本に共通する赤山は場所なり建築物なりに過ぎない。しかし、以下の源平盛衰記だけに記されるものは、これらとは全く様相を異にする。先ず源平盛衰記には「赤山大明神」という一段がある。その内容は『日吉山王利生記』にも大半が出ている。その記事中、慈覺大師が帰朝航海の途上、悪風に逢った時「赤衣に白羽の矢負つゝ船の上に現し給つゝ大師を守護せられけり」ということは「山門堂塔」にも記されている。又、「頼豪祈出皇子」には、三井寺に戒壇建立を許すのも止むを得ないとの関白師実の進言を受けた白河天皇の夢に赤山大明神が現れて、天皇の許しを得て関白を射たいと言ったので、天皇は三井寺に戒壇を建てることを認めなかったという逸話が記されている。このことも「三井戒壇不許」に簡略にその経緯が記されている。関白の進言に関して赤山大明神が夢に現れたという逸話も『日吉山王利生記』にある。それだけではない、「頼豪祈出皇子」から「赤山大明神」に続いて行くという展開も実は『日吉山王利生記』に一致しているのである。源平盛衰記が『日吉山王利生記』から赤山の靈驗譚を取り込んだのは間違いない。源平盛衰記の編著者は従来平家物語が記さなかった赤山大明神の存在に興味を抱いたかと考えられる。このことを示すのが、有名な「源中納言夢」で、この章段の中で、清盛を執り成す女房を座上二番目にいた上臈が「そ頸突」と命ずるので赤衣の官人が情容赦なく門外に突き出す、その官人が赤山大明神とされているのである。赤山大明神が日吉山王に侍しているという構図は『日吉山王利生記』に赤山の逸話が収められていることに通じよう。他の平家物語諸本には赤山大

明神は登場しない。

四

前節で後回しにした「願立」説話について、筋を辿りながら述べて行く。

嘉保二(一〇九五)年のこの事件について平家物語諸本は美濃守源義綱が庄園をめぐる対立から山門の僧円応を殺害したことから始める。そして、この山門の僧の殺害に対して寺官・社司が訴状を提出しようとして来たところ、後二条関白師通が中務丞源頼治に命じて追い返そうとした。それが武力行使の事態となつて、山門側に死傷者が出たという経緯で描いて行く。しかし、早く御橋惠言が中御門宗忠の『中右記』の関係記事を紹介しているように^(註二)、右の平家物語諸本の事件の始まりは山門の側からの一方的な見方に基づいていると考えられる。『天台座主記』のような山門の立場からの纏め、『愚管抄』の師通への山王の神罰という視点、この二つの接したところで平家物語の記事は成立したのに違いない(師通への神罰が主軸をなしているので、『愚管抄』の視点がこの説話の始源になつたと見られるが、既に名波弘彰氏が指摘されているように『愚管抄』には「誤伝か誤解」があり、平家物語諸本も事件の経緯は『愚管抄』と異なる)。『中右記』によれば義綱にしても頼治にしても朝廷の一致、一貫した姿勢の下に行動しているのだが、平家物語諸本の中、延慶本・源平盛衰記と『日吉山王利生記』とは、師通の決定が中宮大夫師忠の意見に従つて行われたとする。そして、これら三本は、この記事に対応するように大江匡房が師忠を批難し、嘆いたということ載せている。大江匡房は日吉山王に関する記録『扶桑明月集』等を作成したと伝えられているのであるが、師忠の意見を採用しているという話は、事件当時生存してい、日吉山王に関する記録を残して

通り源平盛衰記が最も多く使うが、一方、当道系諸本では山王に言い換えられてしまう場合も少なくない。

客人・八王子・十禅師三社は、平家物語諸本の「山門衆徒内裏へ神輿振奉事」(延慶本)の冒頭で、その神輿が陣頭に振り下ろされるという形で出て来る。源平盛衰記には、更に過去六箇度の神輿下洛を纏めた記事もある。その記事は、『天台座主記』とも繋がりがありそうだが、保安四(一一二三)年の条では、『天台座主記』に記されている七月一日の三社の神輿の振り下ろしが源平盛衰記にはない等の異同もある。

前記の三社のうち客人社は、源平闘諍録を除く諸本の「白山神輿山門ニ登給事」(延慶本)で、本社・末社の繋がりが山門に運ばれて来た白山の神輿がここに入れられたとして出て来る。猶、源平盛衰記を除く諸本の右の記事中には客人とは白山のことだとはっきり記した文がある。又、全ての諸本がこの前後に、白山が山門(日吉)の末社とされていた旨を記す文をもっている。白山が日吉七社の一つとして祀られていることは『日吉山王利生記』『耀天記』の中でも示されている。猶、源平盛衰記の「白山神輿登山」には、白山権現を迎えるために山王が七つの船を出して迎えに赴くという夢を「比叡辻の神主」が見るといふ逸話も記されている。

八王子は前出の外、次の十禅師と絡みながら、著名な嘉保二(一〇九五)年の「御こしふり」(覚一本)事件で出て来るが、この記事については節を改めて記すことにする。

十禅師は、安元三年の神輿振り下ろしに始まる記事の中で比較的多く出て来る。それは、白山の神輿が比叡山に運び込まれる部分に客人社が多く出て来ることに對をなす観がある。このように三社の中で十禅師の名が特に出て来ることになったのは、この事件の混乱の中で十禅師の神輿に矢が立ったからである。又、源平闘諍録を除

く諸本の「山門ノ大衆座主ヲ奉取返事」(延慶本)で、明雲の奪還を謀る為に大衆が結集した場所も十禅師とされている。中でも当道系諸本や源平盛衰記では、大衆が奪還の成否を祈念すると、童(源平盛衰記では老女)に十禅師権現が乗り移って託宣することになっている(延慶本などにも物憑きが出て来るが、山王、七社権現が乗り移ったという表現である)。更に第二節で記した「付 山王効驗之事」であるが、これは澄憲が昔飢饉・疫癘の年に仁王経の供養(根本中堂等では講読)を行ったところ、靈瑞があつて止んだという効驗を語った条である。延慶本・長門本が「地主十禅師」の社壇、四部合戦状本が「大宮、二宮十禅師御前」という表現になっていた。又、覚一本、中院本の「平家山門連署」(覚一本)では、連署を受け取った座主が十禅師の御殿にこれをだめて、三日加持したところ、一首の歌が上巻に浮かび出たということ(延慶本に同じ逸話があるが、そこでは「山王ノ御寶前」となっている)もある。最後に、長門本では白山の神輿が客人社に入れられる前に白山の大衆の手で十禅師に運び込まれたということが記されている。以上の通り各社の中では最も多彩に描かれているが、山王への祈りを十禅師社で行っているという形が多いようである。しかし、各本ごとに見ると、それぞれに十禅師祈願の場面を選んでいるという風で、特に顕著な傾向の本は見出し難い。猶、『日吉山王利生記』等の靈驗集の十禅師譚については、山本ひろ子氏に「全八十四段中十禅師の靈驗譚は、二十段近くあり群を抜いて多い」といふ指摘があつた。^(注九)

三宮は、源平盛衰記の「白山神輿登山」となっている章段の「御こしふり」にあたるところで「八王子と三宮との神殿の間に磐石」^(テリ)とあるのが、唯一の例である。

西坂本の赤山も平家物語や『日吉山王利生記』に出て来る。長門本や当道系諸本の「付 山王効驗之事」では「保安四年七月二神輿

三聖が伝教大師に戒を受けたことは『日吉山王利生記』にある（『日吉山王利生記』の三聖は大宮・二宮・聖真子である）。

最後に、再び大宮に戻って、その東竹林、西竹林のことを記して、延慶本の山王垂跡はそこで終わる。前述の三聖という言葉が出て来たところから後は、伝教大師にそれぞれが契りを結んだということが各記事の要点となっている。東竹林と西竹林では、住吉明神である東竹林の記事が比べものにならない位に詳しい。猶、同記事中の山王と住吉明神が大將軍、副將軍を努めて夷賊を征伐したという住吉明神託宣は源平盛衰記にも別な章段で出て来る。この住吉明神託宣は『日吉山王利生記』にもあるが、延慶本とは構成上は一致しているのに、挙げる戦役が異なる。猶、『耀天記』『山王事』に承平戦役での二神協働、「山王記」に両竹林のことが記されている。

以上のように「山王垂跡」では、延慶本に『日吉山王利生記』に共通する内容が多く見られるが、延慶本・源平盛衰記・『日吉山王利生記』で互いに異なる点も少なくない。

三

次に各社を中心にして平家物語諸本に描かれている様子を具体的に記してみたい。

大宮は、前節の「山王垂跡」に出ていたが、全ての諸本にその名が見えるのは、安元三（一一七七）年四月十三日の神輿の振り下ろし事件で、十禪師の神輿に矢を射立てられた山門の衆徒が「大宮二宮以下ノ七社 講堂中堂諸堂一字モ不殘焼拂」（延慶本）と言って、朝廷に裁断を迫る箇所だけである。以上の外には源平盛衰記の「仙洞管絃」の藤原師長の琵琶の逸話の中に、早魃の時、日吉社大宮で雨乞いの為に秘曲を弾じて雨を降らしたということがある。

二宮が二宮という名で出て来るのは、「山王垂跡」と前引の衆徒

の言葉の中だけである。ところが、延慶本・長門本・源平盛衰記では二宮の外、地主権現（鎮守権現）としても出て来る（先述の地主権現十禪師の問題はある）。この地主権現が出て来るのは「付導師山門中堂ノ薬師之事」（延慶本）で、本地の薬師如来が地主権現の床下に暮らす「無縁貧道ノ僧」となって、得長寿院の供養の導師を務めたということになっている（源平盛衰記は異説として略記し、僻事と見ている）。因みに、地主権現の本地が薬師如来であることは『日吉山王利生記』『耀天記』にある。

聖真子は単独では出て来ない。しかし、聖真子を含む筈（延慶本には前節で指摘した問題がある）の三聖という語は延慶本・長門本・源平盛衰記を中心に多くの諸本に出て来る。比較的多くの諸本に見られるのは、「山門ノ大衆座主ヲ奉取返事」（延慶本）で、配所へ赴く途中の明雲座主が迎えに来た大衆に「身ニ誤ッ事ナシ 両所三聖定テ照覧シ給ラム」と言う（猶、覚一本・中院本・八坂本では「兩所山王」（覚一本）などと「三聖」部は不明瞭になっている）ところである。これに次ぐものとしては、延慶本・長門本・源平盛衰記の「白河院三井寺頼豪ニ皇子ヲ被祈事」（延慶本）の章段で、良真座主が堀河天皇の誕生を「両所三聖醫王善逝」（延慶本）に祈請した（当道系諸本では「山王大師」（屋代本）などとなっている）というところがある。この逸話は『愚管抄』、『日吉山王利生記』にもあり、『日吉山王利生記』が「山王三座」という表現になっている。又、長門本・源平盛衰記の「山門落書」（源平盛衰記）では、明雲座主の赦免の取り成しを清盛に頼めという趣旨の落書の中で「習皆成教網之者何可悦三聖之威光消」（源平盛衰記）という表現が出て来る。源平盛衰記では外に「静憲鳥羽殿参」の章段でも、静憲が後白河法皇を「ことには君の頼みおほしめす山王七社両所三聖よも捨てまいらせ給はし」と言ってお慰めるところもある。以上の

『日吉山王利生記』^(注五) いずれにも出て来る。延慶本にあって源平盛衰

記にはない、田仲常世の船に乗って琴御館牛丸の許に入る姿は『日吉山王利生記』の記事に近い。しかし、『日吉山王利生記』では御

法を唱える波の動きを追って由緒が記されて行くが、延慶本のも

は大津神人と粟の御供の由来譚という風である。又、延慶本の大宮

記事は、右の常世が関わる部分から牛丸が関わる逸話に移って、神

の番号や社殿の位置が語られるのだが、『日吉山王利生記』では宇

志丸の子孫が祠官を務める由来が記されているだけである(常世関

係の記事と牛丸関係の記事の量が逆になっている)。延慶本の大

宮記事の山王の番号以外は『耀天記』『大宮事』に殆んど出て来る

(他の項にも散見するが)。一方、源平盛衰記の大宮権現の条は、慶

命座主が山王の託宣を得て、大宮権現が釈尊の垂迹であることを知っ

たという経緯を語る文章になっている。慶命座主は『日吉山王利生

記』に大宮権現に理観の深義を習ったということが記されているが、

源平盛衰記のような具体性はない。猶、源平盛衰記の山王の託宣も

殆ど同じものが『耀天記』『山王事』に記されている。

次に二宮だが、延慶本の記事は二宮が横川、現大宮社地、現二宮

社地と移ったことが中心になっている。この遷宮は『日吉山王利生

記』にもほぼ同様に記されているが、『日吉山王利生記』のものは、

地主権現とも呼ばれる由来等と同じ箇所では記している。猶、『日吉

山王利生記』には延慶本にある二宮が「拘留尊仏ノ時ヨリ神明ト顕

レ」たという記事がないが、この記事は『耀天記』『山王事』に

「古老ノ人ノ傳」として出て来る。これに対して、源平盛衰記の二

宮記事はその地主権現と呼ばれる由来を語るものとなっている。し

かし、その内容は『日吉山王利生記』や延慶本(或説として)では、

大宮条に記されていた「一切衆生悉有仏性」と唱える波に乗って二

宮が来た等となっており、『日吉山王利生記』の名称由来と全く異な

る。猶、『耀天記』『山王事』には源平盛衰記に近い記事がある。

又、源平盛衰記は地主権現を国常立の尊とするので、大江匡房選

「神祇宣令」の説をも、取り込もうとしたものと見られる。

源平盛衰記の「山王垂迹」は大宮・二宮しか記さないが、延慶本

のものは更に以下のことを続ける。

先ず、地主権現十禅師という奇妙なものを挙げていようである。

この地主権現十禅師は天照大神の御子で、これに大宮、二宮を合

せて三聖と言っているように取れる。先述のように『日吉山王利生

記』では二宮を「天照太神の第二の御子日本國の地主」としている。

延慶本の記事は、それに十禅師を加え(地主権現である十禅師と読

める)、三聖の一つとしているらしい点が、『日吉山王利生記』と

大きく異なる。地主権現十禅師は『耀天記』には出て来ない。

ところで、この地主権現十禅師は延慶本の他の箇所等にもあり、

又、他本との関係も考えられる。他の箇所というのは「付 山王効

験事」に、

七ケ日ノ間十四万七千余座ノ仁王經ヲ奉^ル講讀^シ 供養ハ地主十

禅師ノ社壇ニテ被^レ遂ニケリ

とあることである。この記事は長門本にもあり、長門本も「地主十

ぜんじ」としている。又、同じ記事の四部合戦状本の該当部は「供

養ハ可^シト有^ル伊王山王^ヲ 御前^{ニテ} 議定^{シテ} 有^{リケル} 大宮^ヲ 二宮^ヲ 十禅師^ヲ

御前^{ニテ}」となっている。筆者には、この四部合戦状本のこの表現

が延慶本の地主権現十禅師(長門本も)や大宮・二宮・地主権現十

禅師で三聖としているらしいことに深く関わっているように思える。

延慶本も「付 導師山門中堂ノ薬師之事」には十禅師の付かない地

主権現という表現が何回も出て来る(長門本も同じ)ので、延慶本

の山王垂迹、延慶本・長門本・四部合戦状本の山王効験事は同一の

資料に依って書かれた可能性が大である、ということになるのか。

平家物語の主な諸本に描かれた比叡山の神々

橋 口 晋 作

平家物語には、保元物語・平治物語・承久記と異なり、神祇信仰に関わる多くの記事がある。^(注一) 筆者は、久しくこれらの記事に興味を抱き、「『平家物語』諸本に描かれた中世の神社、神祇をめぐって」などの拙稿を纏めて来た。比叡山の神々についても、最も注目されて来ている「願立」説話について、「『願立』説話展開の再検討」^(注三)という拙稿を発表している。このように比叡山の神々については、何回か、その時々に関心から考察し、言及して来ているのであるが、平家物語諸本に出て来る箇所も比較的多く、多様であり、一方、「願立」説話に関する拙稿でも充分でないところが考えられたりするので、ここに改めて、その記事の全体を俯瞰してみることにした。

周知のように兼好法師は、平家物語について「山門のことをことにゆゝしく書けり」と評している。この「山門のこと」の中に、比叡山の神々が含まれていることは間違いないだろう。

猶、本稿で取り上げる諸本は延慶本、長門本、源平盛衰記、南都本、源平闘諍録、四部合戦状本、屋代本、覚一本、中院本、八坂本である。

一

東坂本の日吉神社に祭られている神は山王と称されているが、平家物語諸本では医王山王、日吉山王、山王大師、山王権現、七社権現と四字の呼称も多く用いられている。これらのうち山王大師は源平盛衰記には全く使われていない。この山王大師という呼称は、山

平家物語の主な諸本に描かれた比叡山の神々（橋口）

王を仏教の大導師と見做すものであろう。この神道と仏教の習合した呼称を避けたところに、源平盛衰記編著者の思想的立場が出ていそうである。一方、当道系の諸本、屋代本・覚一本・中院本・八坂本には山王権現・七社権現という表現が全く出て来ない。しかし、八王子権現という表現はあるので、当道座では各社毎に権現を捉えていたのではあるまいか。

平家物語諸本に出て来る日吉神社は普通上七社である。源平闘諍録の「門脇殿被請受於成經事」の章段中には「是偏蒙山王廿七社御罰恐覚」という興味深いミセケチ訂正がある。源平闘諍録のこの文（に近い表現も）は他の諸本にはない。とすれば、この訂正は源平闘諍録の文面を見直した人が、平家物語における日吉神社は上七社に限られるという判断を下したことになる。ところが、八坂本には一箇所だが、二十一社が本文に出ている。それは「院の流され」の句の「殊には君の執しおほしめす日吉山王廿一社一乗守護の御ちかひあらたまらせ給はすは」の部分である。ここは中院本でも「日吉の山王七社」となっている。現存の諸本が成立した時、二十一社の組織は出来ていたかと思われるが、作品上どう描き出すかで源平闘諍録を読み直した人と八坂本の作成者とは右のような差が生じてしまったのである。

二

延慶本と源平盛衰記は、平康頼と俊寛の間で神祇信仰が論じられる本であるが、^(注四) 諸本の中でこの二本だけに「山王垂跡」（源平盛衰記による）という纏まった記事がある。しかし、その内容は、神祇信仰の場合もそうであったが、相当に異なる。

山王、大宮権現が欽明天皇の代に三輪の門神として天降り、天智天皇の代に大津に移られたということは、延慶本・源平盛衰記・